

テレビ修理からロボット製作へ 日本人に学んだ基本の大切さ

国立職業訓練校 ソウ・ソクチェットさん

今年3月、カンボジアで初めて開かれた「ロボットコンテスト」、通称ロボコン。日本ではおなじみだが、カンボジアではロボットを作ることさえ初めての学生ばかりだった。国立職業訓練校からも学生が参加した。

「かつて電気電子工学科といえば、テレビやラジオの修理ばかりだった。ロボットを作るようになるとは」。同校チームの指導者の一人、電気電子工学科副学科長のソウ・ソクチェットさんは、感慨深そうに言う。

ソクチェットさんはまだ内戦中の1987年から同校の前身であるプレアコソマ総合技術専門学院に勤務し、1992年からは教員になった。当時、カンボジア国内ではテレビやラジオ、ラジカセなど電気製品が急速に普及し、修理のニーズが高まった。中には、中途半端な知識や技術で商売をする人たちもいた。

同校に、青年海外協力隊員として馬渡秀嘉さんが派遣されたのはその頃、1993年のことだ。ソクチェットさんは、カウンターパートとして彼を受け



■ソクチェットさん(左)と馬渡さん(1994年ごろ)

入れた。「初めはクメール語も英語もおぼつかなかった。私は彼にクメール語を教え、彼は私に日本語を教えた。そうするうちにコミュニケーションができるようになりました」。

その2年後、馬渡さんの橋渡しもあり、ソクチェットさんは愛媛県松山市の電気店に研修に行くことになった。その店の顧客サービスセンターで約10カ月の間、電気製品の修理を学んだ。「松山市に行く前、私は学校で教える傍ら、自分でも店を開いて電気製品の修理をしていました。でも、日本で経験した修理は自分のやり方とは違いました」。

直ればいい、ということではなく、きちんと原因をつきとめ、そこから直していく。基本的なことだが、復興期のカンボジアではなかなか身に付けることができなかった技術だ。「一つひとつの作業から、たくさんのことを学びました」と、ソクチェットさんは言う。

電気電子工学の技術は日々進化し、複雑になる。それだけにますます「基本」が大事になっている、とソクチェットさんは考える。馬渡さんや、日本での研修から学んだことは、今もソクチェットさんの拠り所になっている。

